

同窓生 シリーズ

64



30回生

犬養裕美子
いぬかい ゆ み こ

◆プロフィール

レストランジャーナリスト。東京を中心に世界のレストラン事情を取材する。味だけではなく、そのレストランをいかに楽しむかを提案する記事が支持されている。

この原稿を書くにあたって、はたと考えたらず卒業して30年たつ。とても信じられない。だって今でも当時のクラスメイトとはメールのやりとりをしたり、年に何度か会う。年相応に話題は変わるが（子供の教育から、最近は健康問題ですね）、話している時は高校生のままだ。なにしろお世話になった先生のモノマネで、未だにみんなで笑える私たちで：なんなんだろう。でも、高校生活を思い出すと決してバラ色ではなかったのである。三年間バスケットボール部に所属したが、練習はきつかった。ひと一倍身体がデカイ私だが、ひと一倍弱虫なので、すぐに薬を打たがる。それをコーチの先輩や仲間ひつぱられて、ずいぶん意識が変わった。三年の引退後も勉強そつちのけで練習に参加していたほど。継続することで見えてくるものが、ようやくわかったように思う。そして、それはあの時期でなければでき

なかった。ただ、毎日同じことの繰り返し：の先に、気が付くことでもすてきなプレゼントが待っていた。辛くて、止めたくて、泣きながら走った練習があつたから、勝つた試合の喜びは忘れられない。その気持ち私の中にずっとあるから、今でもさまざまなおスポーツを見ていてすごく感動する。技術レベルは違つても真剣だつた思いは共有できるのだ。さて、私は今、レストランジャーナリストという仕事をしている。お店を雑誌やテレビ、ラジオなどで紹介する仕事だ。私なりに選択基準があり、どの店をどう取り上げるか自分で考える。これも毎日、同じことの繰り返し。食べる、話を聞く、原稿を書く。人にうらやましがられるが、一日何度も食事をしたり、同じものだけを食べ続けるには体力も気力もいる。身体で体験しないと納得しない私にとつての天職かもしれない。その体力と気力を養つてくれたのが、

他でもない高校生活だつたと改めて思う。三年ほど前からマラソンを始めた。練習は一人、自由に走る。怒られることもない。その気楽さからすつかり走るのが好きになつた。ただ、もう少しタイムを上げるにはどうしたらいいかが悩みだ。高校時代のように、先輩に怒られながら練習したら：。その厳しさが妙に懐かしい。私の六中健児魂は今も燃えている。今、高校生活を送っている後輩たちに伝えたい。大学に行つたら、社会人になつたら何もかも楽になるなんてことはない。高校生のうちに、どんな小さなことでも何かをなしたげた自信をつけておくこと。あなたの魂の中にもきちんと六中健児の魂はあるのだから。